
「ホストがなんぼのもんじゃい」

巡芳もとめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ホストがなんぼのもんじゃい」

【Nコード】

N7442Y

【作者名】

巡芳もとめ

【あらすじ】

ホストの言うことなんて全部嘘。信用できるわけがない。

「きのうもホストクラブ行ったんだけどさ」

「またあつ？」

とろけるようなうっとり顔で友達が言うので、私は強い口調で聞き返してしまった。

カラオケボックスに来て三時間が経過。歌い疲れた私達は、食べ物頼んでまったりしている。

「いつも私が指名する男の子がさ、もう本当優しくて……」

夢見心地で目を閉じながら彼女は言う。

「優しいったって、ホストの言うことなんて全部嘘にきまってんじやん」

鼻で笑ったら睨まれた。

「私の良いとことか誉めてくれたりさ、可愛いって何度も言ってくれるんだよね」

また夢の中に戻った彼女は、きのうの出来事とやらを思い出し頬をピンクに染めた。

「そんなの心の中ではどう思ってたか。本当はブスとか思ってるかもよ」

テーブルに並ぶ六品ほどもある皿を、一皿一皿少しずつつまみ食いしながら、私は興味なさそうに言った。

「あんたねえ、さっきからいちやもんばっかつけて」

ケーキにフォークを伸ばしたところで、彼女はそのケーキ皿を私の前から奪って言った。

「だって本当のことじゃん。どの女にもみーんな同じこと言ってるだから」

なんて言ってたその一週間後。

「俺ホストやろうと思つて」

彼氏が突拍子もないことを突然言い出した。

「は？」と言つたまま思考停止した私。

今まではごく普通の会社員だったのに、一体何でそんなことに？

それから彼が、

「今日のそのかつこ、可愛いじゃん」

などと言つても、私は不審者でも見る目で彼を見てしまうようになつた。

「そんな目細めて見ないでくれる？ 人を不審者扱いして」

自分のことを不審者扱いする私に、彼はどうやら嫌気がさしてきているらしい。

「だつて、ホストの言うことなんて信じられないんだもん」

「ホストやる前から、俺はあなたの彼氏だったでしょーが。何で信用できないわけ？」

溜め息まじりに彼は言う。

このままでは確実に、私の彼への想いは少しずつ鎮火していきそうな予感がした。こんな理由で終わりたくない。けれど彼への不信感はずのるばかりだった。

しかも彼は店ではナンバー2の人気らしい。

「余計に嫌だ！」

立ち上がつて一人叫ぶ私。「何が嫌なの」と頬杖つきながら私を見上げる彼。

「どうでもいいけど、座れ」

彼に言われるままに大人しく椅子に座り直す私。不満顔のまま。

ここは喫茶店。みんなが私に注目している。

「一回さ、店来てみなよ」

絶対やだね、と心で呟く私。

「金を出すから。おまえが想像してるより健全なところだから」

このまま彼と終わるのも嫌だ。彼にうながされるまま渋谷店に行

くことになった私。

週末の金曜日の歌舞伎町。

道にうじゃうじゃとたむろっているホストの男達。

「怖いよー」

私は涙目になりながら逃げるようにして、彼から教えられた地図を片手に店に急ぐ。

キラキラとしたネオン。派手な装飾の店。

まるでマフィアのマジトにでも侵入するかのように、私は壁に隠れながら店の奥へとじりじり進んだ。

「ノアーノアーどこなのー？」

私はなおも壁に隠れつつ店の中を覗き見る。

彼の本名はノア。店での源氏名までそのままノアという名前を使っているらしい。他の女たちも彼の本名を気安く呼んでるかと思うと、とてつもなく腹立たしい。

「なにやってんのおまえ」

壁に隠れる私を見下ろすノア。「ノアー！」と思わず抱きつく私。私はもちろん彼を指名。お金は全額彼が払う。前もってこっそり彼が渡してくれたもの。私がノアの彼女だなんてことももちろん内緒。

「来てみてどう？」

黒いスーツに身を包んだ黒髪のノア。会社員だったときもスーツだったけど、それとは全然雰囲気違った。

「思ったとおりキラついたとこだね。信用ならないわ」

強気な態度で文句を垂れたが、内心本当に怖くて、テーブルの下ではずっと彼の手を握っていた。ノアもいつものノアじゃないみたい。

「俺のこと嫌いになったの？」

真剣な顔で私の顔を覗きこみ彼は言った。嫌いにはなってないけど、遠くに行ってしまったみたいだ。

「だいたいさ、なんで急にホストなんてはじめたの？」

「うーん。自信がなかったから」

予想外な見当違いな答えが返ってきて私は首を傾げる。

「俺、自分に自信なくてさ。実を言うと、おまえから本当に好かれてるかも自信なかったんだよね」

なんですと？ と目を丸くする私を見て笑う彼。

「こんままじゃおまえが去っていく気がして。もっと自分の殻を破りたかったし、会社の中で真面目な良い人間演じてるのも疲れたし。今まで一度も聞いたことのなかったことを彼は話し出した。」

「でもそれが結果こうやって逆効果になって、おまえから信用されなくなると思ってたから」

と言うと、彼は悩んでいる顔をした。

そんなこと考えてたなんて、全然知らなかった。

私の中の不信任はそれを期に不思議なくらい消え去った。

「ホストの言う事は全部嘘で信用できなかったんじゃないの？」

水をさすようなことを言う、ホスト通いの友達。

むっとして今度は私が彼女を睨み返す。彼女はそんな私を見て笑う。私も笑う。

「ホストも、それぞれいろいろ事情があったり、いろいろ人生の悩みがあるんだねー」

知ったようなことを偉そうに語ってみる。

「でもさ、ノアくん、自信つきまくって遊び人になっちゃったらどうする？」

面白がって言う友達。

さんざん今までホスト通いのこの友達のことをけなしてきた私は、最近こうして、嫌というくらい反撃を受け続けている。

負けないわ。

ホストがなんぼのもんじゃない。

そんな壁に私たちの愛は崩れたりなんかしないわ。

偉そうなセリフを心の中で言ってみる。

(後書き)

ホストクラブ

私は 行ったことはありません

歌舞伎町のホストのお兄さんたちは見かけます

怖いです・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7442y/>

「ホストがなんぼのもんじゃい」

2011年11月22日03時13分発行